

【A分科会】～使いやすく親しみやすい図書館をデザインする～

助言者	中村 順子 (ライフパーク倉敷市民学習センター司書)
司会者	高見 千恵子 (倉敷市立柏島小学校司書)
記録者	貝畑 景子 (岡山県立笠岡商業高等学校司書)
	森谷 彩矢 (岡山県立玉島商業高等学校司書)

I 事例発表

1 使いやすく親しみやすい図書館を目指して

倉敷市立児島中学校 片山 美枝子
倉敷市立庄小学校 和田 恵子

1 はじめに

環境整備班では、使いやすく親しみやすい学校図書館をめざし、次の5つの取組を行った。

- ①図書館の館内レイアウトの考案
- ②館内掲示についての意見交換と掲示物の作成
- ③アンケートの実施
- ④図書館掲示年間の計画の作成について
- ⑤リサイクルして作る掲示物

2 館内レイアウトの考案

倉敷市立庄中学校をモデル校とし、レイアウトを考案した。

庄中学校の図書館の実態として、庄小学校の二分の一ほどの広さで変形しており、新入生から「小学校の図書館と比べて狭く、本が少ない」と不満の声があった。また出入口から背の高い本棚が見え、圧迫感があった。

これを改善するために、次のような点を考慮し、館内レイアウトの変更を実践した。

- ①使いやすい図書館を考える。
- ②出入口から館内を見て、圧迫感をなくし、入りやすくする。
- ③限られたスペースを広く感じさせるための工夫をす

る。

④カウンター内から館内の死角がないようにする。
具体的には、次のように変更した。

- ・ 殺風景な出入口に、四季の花を植えたプランターを設置。
- ・ 出入口の本棚を移動。圧迫感がなくなり、窓からの光を遮るものがなくなったため明るく感じられるようになった。
- ・ 館内全体を見渡すことができる箇所に、カウンターを設置。
- ・ 本棚があった箇所に閲覧機を移動。カウンター内からも以前より生徒の様子が分かるようになった。

レイアウト変更後、生徒・職員かに感想を訪ねると、「館内が明るくなった。」「変更前より広く感じる」といったような好印象を持ってもらえた。本棚や閲覧機の移動により館内が明るく広く感じられるようになり、出入口より館内を見渡せ、入りやすくなった。また、カウンター内からの死角もなくなった。

利用者の視点に合わせたレイアウトを考えることにより、利用者が使いやすく親しみやすい図書館になったと思う。

3 館内掲示についての意見交換と掲示物の作成

現在各校で掲示している物、あるいは新たに作成した物を持ち寄り、作り方、掲示場所、使い方などについて意見交換を行った。トレーやダンボールなどの廃材をリサイクルして作った館内表示や新刊案内、ラミネート加工し丈夫で長く使える日付表示板、児童と一緒に作成した作品などそれぞれに工夫が見られた。掲示作成の際の参考資料や、工夫した点、注意した点などについても話し合った。そこから、

- ・ 作り方や工夫を聞くことができ、参考になった。
- ・ 児童・生徒からすぐに反応が返ってきた。
- ・ 困ったときにも班員のアイデアがもらえてよかった。

などの意見があがった。

以後の各校での館内掲示に役立つアイデアを取り入れるのに、とても良い勉強になっていると思う。

4 アンケートの実施

掲示物の意見交換を行った際に、班内だけにとどまらず、他の学校の図書館の環境・掲示についても知りたいという意見があった。そこで、どんな掲示物を作っているか、掲示場所や期間、著作権への対応などについてアンケートを実施した。

結果は次の通りで、各校の工夫を知ることができた。

- ・ 館内掲示には、著作権の許諾を得た図書を参考にしたりオリジナルの掲示物を作成したりしている。
- ・ 掲示スペース等に制約がある中で工夫をしている。
- ・ 大半の学校が季節ものの掲示物を作成し、新鮮で興味を引く空間作りに努めている。
- ・ 小学校では親しみやすさ・入りやすさ、中学校では使いやすさ・調べやすさを重視している。

5 掲示年間計画の作成

アンケート結果からも、季節の掲示をしている学校が多かったため、一年間を四季に分けた掲示計画を立て、それをもとに季節の掲示やコーナー作りを行った。

その結果、フェルトを使って温かみを出したもの、トレーなど廃材を利用した物など、様々な工夫を凝らした

掲示物やコーナー作りができた。またぬいぐるみやデューブルクロスなどを効果的に使い、本を引き立てる工夫も見られた。

次のようなものが、児童・生徒に好印象を持たれたようだった。

- ・ 木の枝やでんぐりシートなど立体的な素材を使ったもの。
- ・ 紐を引くと動くなど。触って楽しめるもの。
- ・ かわいらしい、明るい、楽しい感じのするもの。

掲示場所については、窓や入口付近などの目立ちやすいところに掲示するのも効果的ではあるが、逆に、人気の無いコーナーに目立つ掲示をすることによって、児童・生徒に興味をもたれるようになってきたという事例もあった。季節の区切りは以下の表の通り。

季節	月
春	3月・4月・5月
夏	6月・7月・8月
秋	9月・10月・11月
冬	12月・1月・2月

コーナー作りの反省点として次のような意見が出た。

- ・ コーナーで紹介する本は、読み物だけでなくいろいろな種類から選ぶようにする。
- ・ 1シーズン活用できるように幅をもたせる。
- ・ 本が借りられてもすぐ次の本を並べられるようにたくさんの本を用意しておく。

四季の計画を立て、また他の学校の掲示物を参考にすることで、掲示物を作成する時間を短縮できたり、材料を工夫したりすることができた。掲示場所やコーナーの場所などが異なることや各学校の行事などもあり、細かいテーマは設けず、それぞれの学校に合わせ作ったが、1シーズンの掲示物といっても季節に合わせ少しずつ変化させる工夫や、マンネリ化しない掲示が必要だと感じた。そこで、より季節に合わせた掲示ができるように月ごとのテーマも考え、計画に加えていった。

6 リサイクルして作る掲示物

これまでの研修過程で、図書館環境を考えながら様々な掲示物を作成してきたが、エコロジーや経費削減を考えて作ったものも多数見られた。そこで今の世の中の情勢に合わせて、廃材をリサイクルして作る掲示物に着目し、作成する際に参考になるような材料や道具・参考資

料を検討した。

まず、各校でリサイクルして作った物を持ち寄り、意見交換を行った。参考図書を見て作ったり、見ながら広がるイメージで掲示物を考えた。わかりやすく見やすく彩る新刊紹介や別置コーナーの掲示・天井空間の利用、またダンボール・トイレットペーパーの芯などの有効な活用も見られた。相互の工夫や反省点などを意見交換することにより、幅広い研修となった。

リサイクルして作った物は、材料が入手しやすく、捨ててしまうような物でも活用できるという利点がある。その反面とかく美しく見えない・地味になりがちであるという難点もある。その点に留意しながらアイデアや工夫を重ね、便利で用途に沿ったものを考えていった。

今後も、身近な廃材を捨てる前に何かに利用できないかを考えていきたいと思う。そしてリサイクルして作る掲示物は、限られた資源や予算を有効に使えることから、これからも館内掲示の材料に取り上げて活かしていきたいと思う。

7 おわりに

これまでの研修で、館内レイアウトや掲示物などの図書館環境にも留意し整備していくこととて、児童・生徒が図書館に興味・関心をもち、より身近に感じてもらえることができたと思う。そして小さな掲示をするだけでも図書館の雰囲気が新鮮になることがわかった。環境整備をすることは、親しみやすい空間づくりのためだけのものではなく、図書館の雰囲気、児童・生徒へ与える影響など、果たす役割も多いということを感じた。“本に接する場所＝居心地がよくまた来たくなる場所”となるように整備することが、児童・生徒の読書意欲を高めることにつながっていけばよいと思う。

これからも、より使いやすく親しみやすい学校図書館を目指して努力していきたいと思う。

2 探せる配架－別置を見直してみる

岡山県立総社南高等学校 島津屋 護

1 はじめに

別置とは、日本図書館協会からでている『図書館用語集』によると、「管理上、利用上のさまざまな観点から、一般の図書とは別にして配置・排架すること」とある。つまり、一般の本の並びとは違う場所にまとめて置いてあるものを指し、別置と呼ぶことができる。または別置とは基本的に何らかの理由・意図があって作られるものとも言える。

現状では、多くの高校で別置の数が多く、その結果配架が乱雑で、配置がわかりにくかったり、一つのテーマについて調べたいときに、あちこち案内する必要性が生じている。

別置は内容や利用方法に応じて作っておくことで、利用者が直感的に本を選べたり、関連するテーマの本をひとまとめにして見られたりと、図書館への気軽な親しみ

やすさを効果的に演出出来る。しかし、資料全体から見た場合、検索性が低下したり、管理が曖昧になったりとかえって図書館の効果的な利用の妨げになってしまう可能性も含んでいる。これらのどちらの良さも活かす、つまり生徒にとって親しみやすく、かつ探しやすい配架を作るにはどうすればよいか考えてみたい。

2 別置の現状とその内容（アンケートより）

岡山県内の高等学校に別置に関するアンケートを実施し、71校から回答を得た。

県内の高等学校で別置を設けている数は、一校あたり平均8.8種類で、自校の別置の数については、多くの学校が丁度よいと考えているようだった。

別置のうち、半数以上の学校で行われているものは、文庫・新書・大型本と言った資料の形態で分けたもの、

参考資料・進路・小論文・郷土資料、マンガ・絵本・ライトノベルといった内容で別置したものであった。

次に、別置について意見を求めたところ、肯定的なものとして、①生徒が親しみやすい ②生徒目線での配架で不読者を誘えるなど、逆に消極的意見としては、①別置が多いと利用者にとってややこしい ②たまに立ち寄った生徒にはわかりにくい、といったことが挙げられた。

そこで、アンケートの結果から別置のメリット・デメリットを次のようにまとめた。

○形態による別置：文庫・新書・大型本など

<メリット>

- ・ 他の本の間に潜って見つけにくくなる事態が避けられる。
- ・ 「新書を読む」といった課題に対応しやすい。

<デメリット>

- ・ 同一テーマの本が分散してしまう。
(調べる際に何箇所も見ないといけない)
- ・ サイズで置き場が変わるのはわかりにくい。
- ・ 物理的な制限によって単に仕方なく別置。

○内容による別置：進路・小論、参考図書など

<メリット>

- ・ よく利用するテーマでまとめてあると便利。
- ・ 図書館利用の少ない生徒でも見つけやすい。
- ・ 利用の多い本を集めて置くことで利用促進に繋がる。

<デメリット>

- ・ 一般の棚にも関連する本があったとしても、そこしか見なくなってしまう。
- ・ 一度別置すると必要性を見直す機会が少ない。

○共通するメリット・デメリット

<メリット>

- ・ 特定の使い方、探し方をする際には直観的に資料をみつけられる。
- ・ 親しみやすい配架が可能になる。

<デメリット>

- ・ 近い内容の本が分散してしまう。
- ・ 使い方、探し方によっては、かえって本が見つけにくくなり手間が増える。
- ・ 別置が増えるほど検索性が低下する。

3 実践例の紹介

アンケート結果をふまえ、実践例を3例紹介する。

① 新書の別置

新書を混配していることで、新書が一般サイズの本の間に埋もれて見つけにくかったり、「新書の場所はどこ？」と言った質問に対応できなかった。これらを改善するため、新書を別置した。

<実施してみて>

- ・ 新書を目的に資料を探す場合、利用者にとっても案内する側にとっても探しやすくなった。
- ・ 案内されるのを待たずに自分で新書の場所を見に行く生徒も出てきた。
- ・ 貸出の変化は見られなかった。

<今後の課題>

- ・ 近い内容の本が分散してしまうので、案内や表示を工夫する必要がある。
- ・ 内容の近いコーナーとの関連付けが利用者に伝わっていない。
- ・ 新書の中で更に読みやすさ等で分けるかどうか。

② 形態による別置の廃止

教員による新書の別置希望があるものの、実践例①で課題が残ったように、特定主題の本を探すとき多数の箇所を廻る必要がある。

そこで棚板可動式書架を導入し、上2段に新書・文庫を、3段目から一般書を、一番下の段には大型本を並べ、別置を廃止した。

<実施してみて>

- ・ 探している主題の書架で開架分の蔵書を一覧可能でできる。
- ・ 新書を利用したいといった要望にも対応できる。

<留意点>

- ・ 配架方法の性質上、棚の密度に差が生じる。
- ・ 大型の本を収納するスペースを確保する必要性。
(棚板が可動式で無い場合は、別にスペースが必要)
- ・ 別置のためシール等を用いていた場合、元に戻す必要がある。

③ 参考図書の混配

館内中央部分の参考図書コーナーは、図鑑類の利用のみで、その他はほとんど利用されていなかったため、生徒には図鑑場所としてのみの認識となっていた。

そこで、別置を見直し、生徒がよく利用する図鑑類だけを残し、そのほかの参考図書を一般書架に混配し、空いたスペースに館内の壁面にあった0～3類の大型本を配置した。

<実施してみて>

- ・ 混配することで、これまで利用がなかった参考図書

の利用する機会ができるのではないか。

- ・ 本校の利用実態に合っている。
- ・ 0～3類の大型本を以前と比べれば本来の分類に近い場所に置くことができた。

4 別置の工夫と課題

別置を行う場合、形態・内容にかかわらず、利用者にとって目的の資料が見つかりやすくすることが大切である。そのためには、分かりやすくする工夫が必要である。

<工夫例>

- ・ わかりやすい位置に館内図やラベルの説明を置く。
- ・ 別置を置く場所をよく考える。
- ・ デコパネや色画用紙を使った目立つサインを作る。
- ・ 本のラベルへの工夫。(ラベルの色を変える・ラベルの上からシールを貼るなど)
- ・ PC検索からも本の場所がわかるようにしておく。

<今後の課題>

- ・ より一層の表示の工夫。
- ・ データを入れ忘れたままの別置の整理。
- ・ あいまいな別置の基準の見直し。
- ・ コーナー同士の関連付け。
- ・ 有効に機能していない別置の見直し。

など、より使いやすく、資料が探せる配架を目指す必要がある。

5 おわりに

別置には、メリットがある一方デメリットも生じるので、蔵書構成や利用状況、使用目的から必要な別置をしっかり検討し、その別置が必要であるとなれば、別置の存在や資料へたどりつくまでの道筋を利用者にわかりやすく知らせる努力を怠らないようにしなければならない。

別置の短所を補いつつ、親しみやすく直感的に資料を探ることのできるというメリットを活かしながら、どんな場合でも利用者がより使いやすく、目的の資料が探せる図書館作りを目指す必要がある。

II 助言

まず「使いやすく親しみやすい図書館をめざして」では、学校の中のレイアウトを思い切って変更するということは、大変な事だったと思うが、明るく広く、

とても感じの良い、使いやすく親しみやすい図書室が出来上がったと感じた。

また、年間計画を立て、季節に合わせた展示をしている様子を見ると、とても楽しくわくわくした。廃材を使い、工夫して掲示物を作るという発想も素敵だと思い、かわいい作品たちに感心した。私たちの図書館でも是非とも作って、子どもたちが「本に親しんでもらえるように工夫したいと思う。

司書が使いやすく親しみやすい図書室を目指して作っているということは、児童や生徒の“また図書室に何遍も足を運びたいなあ”という喜びにつながると思うので、引き続き皆さんで素敵な図書室を作って頂きたい。

次に、「探せる配架—別置を見直してみる」では、様々な別置のメリットやデメリットをふまえ、それぞれの利用される方に合わせて、いろいろなパターンの別置を工夫している点、また利用者が本にたどり着くために、分かりやすい表示や館内地図を貼る工夫をしている点が、とても参考になった。加えて、別置の本に剥がしやすいラベル等を貼り、わかりやすさだけでなく見直しやすさにも工夫している点が良いと感じた。

ライフパーク図書室は、開架が5万5千冊程の小さい図書室だが、今夏休みでとてもたくさん子どもが来館している。二つの事例発表を聞き、子どもたちや大人の方の利用者にも探しやすい図書室を目指して、レイアウトや展示など様々な工夫をしていきたいと感じた。